

源氏物語千年紀に寄せて  
紫式部の通った道(二)

b. 復路 (武生↓京)

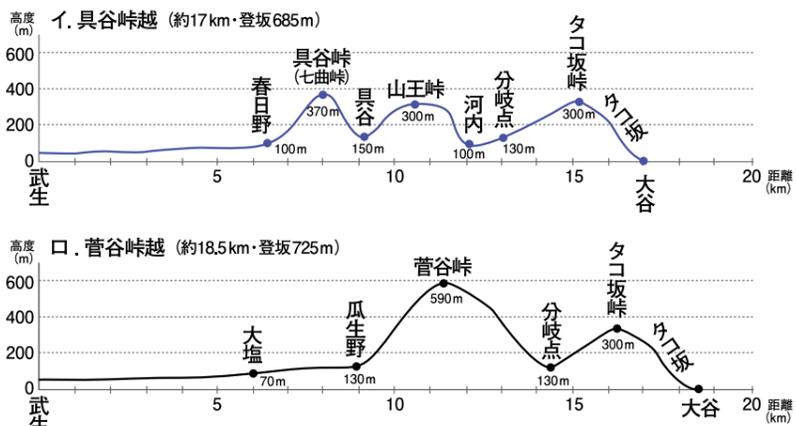
「南条郡誌」などでは、紫式部は復路も往路と同じ山中峠越説だった。最近では大良集落南側のタコの呼坂から大谷集落に入ったとするコースが定説となっている。その理由は、紫式部集の中にある次の文章と歌があるからである。

「都の方へとてかへる山越えけるに、呼坂といふなる所のわりなきかけ路に、輿もかきわすらふを恐しと思ふに、猿の木の葉の中より、いと多く出で来たれば」(と前書して)

「猿もなほ遠方人の声かはせわれ越しわぶるたこの呼坂」(お猿さん達よ、遠く都へ帰ろうとしているタコの呼坂で輿かつぎに難渋している私達に声をかけ合って力づけておくれ)とあるからである。

また、武生からタコの呼坂・大谷までの道については、次の二つが考えられる(図参照)。

図(4) 峠道高低図(復路)



ア. 春日野・具谷峠コース

次の菅谷コースに比べて距離が約一・五キロメートル短く、登坂高度も約百メートル低いので「福井の歴史街道」(上杉喜寿著)や「河野村誌」などでは「タコの呼坂道」としてこのコースを推薦している。しかし、春日野から具谷間の具谷峠越は急勾配なのでジグザグ道が多く地元では「七曲峠」「七万曲峠」とも呼ばれており、先述の式部の文にもあるように輿で移動する式部一行にとつては無理なコースだと思われる。

イ. 大塩・菅谷峠コース

この道は先月号でも述べたように「まぼろしの北陸道」とも呼ばれ、古代から五幡・元比田・大谷・大良で焼かれた塩を越前(大塩)に送る「塩の道」である。従って、瓜生野から菅谷峠までの尾根伝い道は、長年にわたって塩を運ぶ人夫や牛馬の往来でけずられ、幅広い(三メートル以上)U字路となつて今もはっ

の部屋にしのび込むことだが、もともと大和詞(漢字が日本に入る前の言葉)に「よぼ・う」という言葉があつて「結婚を求めて呼び合う」というのが本義である。漢字が入つて、嫁い・婚い・夜這いなどが当字として使われるようになった。どうせ当字ならば、本文中では「夜媒」で表したい(媒は仲だちの意)。

さて、東海道の「手児の呼坂」では若い男女が呼び合つて夜媒の約束をする風習があることが、先の万葉集の歌を通して京の貴族達は知っていたのであろう。そして、東海よりもっと近い越前の大谷付近に、よく似た名前の「タコの呼坂」があり同じ夜媒の風習があることも知られていた。これは、この時代には当町の

大谷と京の藤原一族との間に深い関係(後で述べる)があつたことから推測できる。

当時の紫式部は二十六歳の多感な娘盛りであり、帰京して書き始めた一大長編ロマン「源氏物語」の構想として、ぜひとも「タコの呼坂」を見ておきたかつたのであろう。

これは源氏物語の主人公光源氏の殆んどの恋が、歌を詠み合

きり残っている。また菅谷峠から谷川に沿つての降り道の要所には大きな「休石」が置かれたり、谷川には川幅一ぱいに石積があり、川の水も通しなから上表面は道として使われている。これは朝鮮式石橋ともいわれ、古代において百濟・新羅からの技術者の指導で構築されたものである。

私がこの道を通つたとするもう一つの理由は、紫式部が武生で詠んだ次の歌があるからである。

「降り積みて、いとむつかしき雪を、かき捨てて山のようにしなしたるに、人々登りて「なほ、これ出でて見給へ」と言へば」(と前書して)

たと思う。従つて、召使い達が雪山に登つてはしゃいでいても、式部はとてもそんな気持になれず「それが都へ帰ると縁づけられる今庄のかえるの山々ならば」となつたのだろう。いずれにしても、この道は当時としては大変整備された道であつたということと、毎日望郷の念で眺めたかえるの山の一つホノケ山(菅谷峠)を通つて早く都に帰りたと思つていたのであろうという式部の心情なども合わせて考えると、私はこのコースを選んだものと推定したい。

「手児(又は田子)の呼坂」と呼ばれ、万葉集にはこの呼坂に関連する恋の歌がいくつか出ている。それは、この峠には「愛し合う男神と女神が呼び合った」とする伝説があるからである。その万葉集の中に

式部の歌は、自然を描写する叙情歌より自分の心情の動きを詠むものが多いが、これもその一つだろう。北陸の冬は、式部にとつて「いとむつかしき雪」(大変不快でうっとうしい雪)と表現する。おそらく毎日毎日ホノケ山の方を見ながら、あの山を通つて早く京に帰りたいと思つてい

とほけする、夜明けの時のあなたの朝の顔を思い出すにつけても

「春は解くるものといかて知らせたてまつらむ」といひたるに、「春なれど 白嶺の深雪 いや積もり 解くべき程のいつとなきかな」

うという「呼坂」がきっかけで(これが無い場合もあるが)、夜媒となることが殆んどであることからも推論できる。

「年があげましたら唐人を見にそちらへ参りますよ」と言いよこして、新春になると「春になれば氷さえ東風に解けるもの。あなたの心もうちとけるものだと、どうかして教えてあげたいものです」と言ってきた人(宣孝)だが「春にはなりましたが、こちらの白山の深雪はいよいよ深く積つて、解けるのはいつのことかわかりませんよ」

「方違へにわたりたる人の、なまおぼおぼしきことありて、帰りにける早朝、朝顔の花をやるとて(前書)

「あなたがどちらの方かと見分けようとする間に、朝顔がしぼんでしまつて、わからなくなつてしまつたのは、何とも切ないことです」

「おぼつかな それかあらぬか 明け暗れの 空おぼれする朝顔の花」

「何となく来られた方が、何ともよくわからないことをされて帰られた。その朝早くその方に朝顔(客人の朝の顔とかける)の花を贈つた時

式部集から紹介してみよう。『年返りて、「唐人見に行かむ」

図(3) 行程推理図(復路)

